



カントウータ

Cantuta No.17

平成 23 年 8 月 1 日発行

目次

事務局からのお知らせ	1～3	ボリビア訪問記（第 2 回）	8～11
ボリビアの大型鉱山事業に取り組んで	3～5	フォルクローレ「ロス・カルカス」	11～13
日本ボリビア国際消化器シンポジウム	5～6	ワイナ・ポトシ登頂記	13～16
リチウムに関わる人材育成と技術	6～8	じゃがいもの旅の物語	16～18

事務局からのお知らせ

平成 22 年度定時総会を開催しました。

定時総会決定事項

- 日時：平成 23 年 5 月 26 日（木）
16 時 00 分～16 時 50 分
- 場所：東京都港区西麻布 4 丁目 12-24
第 8 興和ビル 8 階ラテンアメリカサロン
- 出席者：
現在の会員数 77 名（内訳：維持会員 7 社 個人会員 70 名）
出席会員数 55 名（内訳：出席 22 名、委任状 33 名）

4. 議決事項

1) 決算

平成 22 年度（22 年 4 月 1 日～23 年 3 月 31 日）

前期繰越金	1,707,554 円
当期収入	905,527 円
当期支出	812,535 円
収支差額	92,992 円
次期繰越金	1,800,546 円

2) 予算

23 年度（23 年 4 月 1 日～24 年 3 月 31 日）

前期繰越金	1,800,546 円
当期収入	1,100,000 円（全額会費）
当期支出	1,100,000 円

（内訳）

管理費	260,000 円
事業費	286,000 円
予備費	154,000 円
支援事業費	400,000 円

5. 平成 22 年度事業報告

①協会財政基盤の強化・充実について、維持会員 4 社、個人会員 17 名が新規加入、退会者（死亡含む）4 名となり、期末総会員は維持会員 7 社個人会員 70 名である。

②ホームページの整備・充実については、レイアウト変更を含むリニューアルを完了、協会独自で内容変更が可能となった。

③カントウータ（会報）は平成 22 年 11 月に発行した。（平成 23 年 5 月も発行）

④在日ボリビア人、ボリビア在住日系人との交流活発化については、平成 22 年 12 月横浜で在日ボリビア人との懇親会、平成 23 年 2 月～3 月杉浦理事がボリビア訪問時日系団体中心に幅広く意見交換等を行った。

6. 平成 23 年度事業計画

①対外 PR 活動

ホームページのさらなる充実をはかると共に、会報（カントウータ）の発行回数とボリビア関係の記事を増やしていく。

②支援事業計画

当協会の現在の予算規模から見て、直接的財政援助を行うには無理がある。野原氏の身体障害者孤児院の援助や他の分野での協力ができないか調査検討する。

③公益法人認定への対応

当協会の公益法人の認定期限は平成 25 年 11 月末までである。当協会として公益法人・一般社団法人・NPO 法人・任意団体のいずれかを目指すか平成 23 年度中に決めたい。

④財政基盤の強化

上記活動を今後行うためにも財政基盤を強化したい、会員の勧誘にご協力いただきたい。

協会の活動報告

1. ラテンアメリカ&カリブ地域・平和文化観光フェアの支援協力

平成 23 年 4 月 23 日（土）AM11:00～PM3:00 横浜港大栈橋に停泊中のザ・オセアニック号 38,000t の 10 階のプールデッキにおいてピースボート主催で行われた。当協会もボリビア大使館の要請で支援協力の形で参加した。中南米 8 か国の展示ブースがあり来場者は 2,800 人余りに及んだ。ボリビアブースでは特産品のコーヒー、塩また民芸品などの販売を行った。

2. フォルクローレチャリティーコンサート後援
平成 23 年 5 月 5 日（木、祝）PM1:00 から立川市民会館小ホールで東日本大震災のチャリティーコンサートが開催されました。当協会も主催者のアミーゴ（株）の要請により後援しました。チャリティー金額は 25 万円集まり福島県の川俣町に贈られました。

3. GRULAC 主催東日本大震災被災者応援チャリティーパーティーに参加

平成 23 年 7 月 1 日（金）PM5:00～7:00 西麻布ラテンアメリカサロンにて

GRULAC（ラテンアメリカ・カリブの会）主催によりボリビア大使館他同地域 22 か国の在日大使館が参加し、東日本大震災チャリティーパーティー

が開催されました。日本ボリビア協会も大使館からの応援要請を受けて白川会長以下 6 名が参加し、エスニック料理、特産品福引などもあり大いに盛り上がりました。

4. 長野県上田市ボリビアディに協会理事参加

上田市ボリビア国際交流委員会（代表オビディア・オヨラ氏）主催による「ボリビアディ」が 7 月 2 日に開催された。当協会もボリビア大使館の要請を受けて杉浦理事、細萱理事が参加しました。日本・ボリビア合わせて約 100 家族、250 名の参加があり、ボリビア 9 州の各民族衣装を纏った可愛い子供のパレードからトバス・ティンクス・ディアブラータなどのダンス、フォルクローレの演奏、エンパナーダやチチャなどの伝統料理を楽しみました。



新会員の挨拶

国立大学法人山形大学大学院理工学部研究科
准教授 綾部 誠

本協会に会員として加入させて頂くことになりました、山形大学大学院理工学研究科の綾部誠と申します。宜しくお願い致します。

ボリビアと私の関係が始まったのはいまから 16 年前のことで、同国の道路公団職業能力開発校に協力隊の機械科教師として派遣されたのがきっかけです。その後もボリビアには毎年のように訪問し、工学教育や技術協力などの支援活動を行い、現在はサンアンドレス大学（UMSA）科学技術学部のカギ員教授として、同大学の教職員、学生、市民の方々を対象に技術移転、技術経営、産業開発などのセミナーを担当しています。このセミナーは

既に6年目となり、500名近くの方々が参加しました。またラパスを中心とした高等技術専門学校や、他県の大学などでも同様の活動を展開しています。

ボリビアは、私にとって第2の故郷です。同国の産業開発と社会開発を通じて、貧困撲滅と社会安寧を達成するため、引き続き活動に取り組んでいきたいと考えております。

(株)ユニエックス海上貨物営業グループ

国際営業チーム グループ長 小野正明

今度、維持会員に加入させていただきました(株)ユニエックスの担当小野と申します。

弊社は1987年にボリビア国ラパスに現地法人を設立、以来日本発のODA貨物、建機や一般貨物、またボリビア出しのゴマ・岩塩など日本・ボリビア間の輸出・入貨物の一貫輸送を行っております。ルートはチリのアリカ港もしくはイキケ港にて貨物を船からトラックへ積み替え、陸路にてチリ国境を越え、ボリビア国内の指定場所までお届けしています。

昨年1月には貨物の納入立合いの為、チリ・ボリビアへも行って参りました。富士山頂より高いラパスでは若干頭痛に悩まされましたが、街並み、食べ物など環境は想像以上に素晴らしいものでした。特に日本では殆ど入手出来ないボリビアワインは口当たりもよく、それでいてしっかりとした味わいがあり、日本でも購入出来ないものかと探しておりますが未だ見つかっておりません。

今度、日本ボリビア協会殿と縁あって入会させて頂きましたが、大使館関係の方々、会員の方々にも広く弊社の事を知って頂き、少しでも皆様のお役に立てればと思っておりますので今後とも宜しくお願い申し上げます。

ボリビアの大型鉱山事業に取り組んで

住友商事(株)鉛・亜鉛事業部長 松崎治夫

ボリビア南西部のポトシ県に世界最大の塩湖（ウユニ塩湖）が在り、そこに全世界のリチウム資源の約半分が眠っている事は、最近テレビ等でも紹

介されています。我々は、ウユニ塩湖から40km程離れたところでボリビア最大の露天掘り鉱山を操業しています。



サンクリストバル鉱山は、アンデスの高地（標高3,800mから4,500m）に位置し、亜鉛、鉛、銀を全世界に供給しています。亜鉛鉱山としては、世界第6位、銀では、世界第3位、ボリビアの鉱物輸出の半分を占めており、日本が輸入する亜鉛・鉛原料の1割以上は、サンクリストバル産です。皆さんの愛車のボディやバッテリーもサンクリストバル原料で作られているかも知れません

我々が開発している鉱体は、サンクリストバル村の真下に位置していました。この為、開発に先立ち村と住民の皆さんに10km以上移動してもらう必要がありました。村には、16世紀に建造された教会や下の写真のような先祖代々の信仰モニュメントも



ありました。村の移動に当たり、これらの遺産も総て同様に移設する等、地域の文化・風習にも万全の配慮をしてきました。この事業は、長年開発から取り残されてきた同地

域の経済・社会発展の起爆剤になると期待され、10年の歳月に亘る準備期間の後、2007年8月漸く操業開始に漕ぎつける事が出来ました。

資源開発事業は、地元の皆さんの理解・支持なしには、進める事が出来ません。地域には保育所、病院建設、道路建設等のインフラ整備事業にも資金協力し、地元の将来の発展も視野に入れ技術訓練センターも建設し奨学金制度やインターンシップも導入するなど出来るだけ決め細かい配慮を心掛けています。

操業開始までには、当初予想していなかった問題もありましたが、現在1400名の直接雇用（内ボリビア人比率98%）、約3,000名の間接雇用を生み出しています。

私も住友商事が本事業の100%株主になった直後の2009年春から2年間ボリビアに駐在し、ラパスと鉱山現場を往復していました。地域住民の生活水準が目に見えて改善し、新しいサンクリストバル村も発展している状況を見るにつれ、この事業を進めてきて本当に良かったと感じています。この機会に、サンクリストバル鉱山事業を進めるに当たっての住友商事の取り組み姿勢についてご説明させて頂きたいと存じます。



この写真は、2009年6月にモラレス大統領が鉱山を訪問された際の、サンクリストバル村の技術訓練センターの開所式の様子です。

モラレス大統領の左にいるのは、当社の岡会長です。

岡会長が「サンクリストバル鉱山では、環境面・安全面で国際レベルの配慮をしつつ、ボリビア国の大切な資源を最大限回収する努力を続けています。」と大統領に理解と支援をお願いしました。大統領は、「我々は、ボスではなく、パートナーを求めています。」「ボリビアの法令を順守し、ボリビアの環境に配慮する企業を我々は歓迎します」と述べられました。

環境や安全に対する配慮や、法律やルールをしっかり守るコンプライアンスの精神は、16世紀にスタートした住友家の家業から発展した住友グループ企業の一員である住友商事の経営理念の根幹です。

住友商事の使命・経営理念は、

「常に変化を先取りして新たな価値を創造し、広く社会に貢献する」

「健全な事業活動を通じて豊かさと夢を実現する」

「人間尊重を基本とし、信用を重んじ確実を旨とする」

ことを謳っています。

その住友グループの原点ともいえるべき事業は別子銅山という長く世界最大級の地位にあった銅鉱山にあります。



別子銅山は、1691年から1973年までの約300年間操業した当時では世界最大の銅山です。

この間、日本の発展にも輸出、雇用や技術革新などを通じて多大な貢献をしました。

住友グループ企業の経営理念は、この別子銅山の経営を通じて、育まれ築き上げられていきました。

たとえば、環境への配慮です。別子銅山では、周辺の木々を燃料として使っていました。その為、長期間の操業のうちに、写真のとおり、緑が失われてしまいました。

「別子全山をもとの青々とした姿にして、これを大自然にかえさなければならない」

これは、1900年に住友家（グループ）の総理事に就任した伊庭貞剛が、この荒廃した別紙の山々を見て言った言葉です。

彼は、大規模植林プロジェクトを立ち上げ、それまでの年6万本の植林を年200万本に増やしました。

そして、これが今の別子の姿です。



我々は、別子の歴史から、鉱山事業が環境に与える負荷について学びました。

我々が、鉱山活動による環境への影響をできるだけ少なくすることの重要性を認識し、そのために最大限の努力をしています。

先ほどご紹介した2年前のサンクリストバル技術訓練センターの開所式で、岡会長は次のように述べています。

「住友の事業は住友だけでなく、国家・地域社会も利するものでなくてはなりません。」

「ただ、国、地方、そして地元コミュニティの理解と支援がなければこれは不可能です。」

私共は、企業・国家・地域社会が共に繁栄し皆様と一緒に築いて参りたいと切に願っています。

私共は、企業・国家・地域社会が共に繁栄するモデル、つまり、住友・サンクリストバル鉱山・ボリビア多民族国・地方自治体・地域社会が共に成長していけるモデルを、ボリビアの皆様と一緒に

築いて参りたいと切に願っています。

第10回記念日本-ボリビア国際消化器シンポジウムを開催して

特定非営利活動法人日本-ボリビア医療友好協会

東京歯科大学市川総合病院内科学講座 教授

森下鉄夫

昨年（2010年）11月18日～20日ボリビア・サンタクルスのカミノレアルホテルで、第10回記念日本-ボリビア国際消化器シンポジウム（X Simposio Internacional Boliviano-Japones de Gastroenterologia ” Dr.Toshiaki Kamiya”）が開催されました。



（写真1）

日本から末松誠慶應義塾大学医学部長（医化学）をはじめ東京女子医科大学、千葉大学、昭和大学、順天堂大学、慶應義塾大学、東京歯科大学から11名の医師が参加されました。日本とボリビアの医師により胃癌、大腸癌、肝癌、胆道癌、膵癌、口腔癌およびそれらの癌免疫療法、内視鏡治療、手術、胃癌と関係する細菌であるヘリコバクター・ピロリ、食道炎や食道癌をひきおこす胃食道逆流症、さらにボリビアに多いシャガス病、子宮頸癌と関係が深いパピローマウイルスなどにつき講演され、参加者により活発なディスカッションが行われました。

日本-ボリビア医療友好協会¹⁾および日本-ボリビア国際消化器シンポジウム²⁾については、他誌にて既に詳述しました。日本-ボリビア国際消化器シンポジウムは1982年に第1回が開催され、日本-ボリビア医療友好協会は1990年に公式に創立さ

れ、2007 年には特定非営利活動法人になりました。

今回のシンポジウムは、ボリビア側のボリビア-日本医療友好協会（Asociacion Medica y Amistad Boliviano-Japonesa）の前会長 Dr.Toshiaki Kamiya（神谷利明）の追悼シンポジウムとなりました。Dr.Toshiaki Kamiya は1979 年～1981 年に慶應義塾大学医学部消化器内科に留学され、帰国後も日本とボリビアの医療の架け橋として大活躍されましたが、大変残念なことに、2008 年3 月5 日心筋梗塞のため急逝されました（享年 57 歳）。追悼講演を森下がさせていただきましたが、御長男の Dr.Akitoshi Kamiya（神谷明利）は今回のシンポジウムのボリビア側会長を立派に務められました。Dr.Akitoshi Kamiya も2002 年～2005 年に慶應義塾大学、昭和大学に留学されています。

閉会式翌日には、サンタクルスのサンパブロ上級カトリック大学附属日本病院（Hospital Universitario Japonés afiliado a la Universidad Catolica Mayor de San Pablo）（写真 2）とサンファン移住地日本病院（Hospital Colonia Japonesa San Juan）（写真 3）を再訪問しました。



（写真 2）



（写真 3）

第1 回から第10 回シンポジウムまで154 名の日本人医師、3,456 名のボリビア人医師、295 名の他国の医師、24 名のボリビア人看護師が参加されました。

私自身は消化器内科医ですが、本シンポジウムを消化器のみならず基礎・臨床医学の各領域さらには看護領域、コメディカル領域、学生も含めた学際的学術集会へ発展させることを目指しています。また、直接医療には従事されていないボリビアの市民の方々も参加していただける事柄を企画できたらと考えています。次回の第11 回シンポジウムを、2012 年秋にやはりボリビアで予定しています。

日本とボリビアには様々な交流があります。微力ですが、私たちは医療・医学を通した友好・協力を推進したいと思っています。

（特定非営利活動法人日本-ボリビア医療友好協会ホームページ）

<http://www.nippon-bolivia-iryo-yuuko.jp>

参考

1. 森下鉄夫：日本・ボリビア医療友好協会．W' Waves、9：26-27、2003
2. 森下鉄夫：第9 回日本-ボリビア消化器国際シンポジウムと第30 回パンアメリカン消化器病学会特別シンポジウム．W' Waves、13：24-25、2007
3. Morishita T.：Non profit organization Japan-Bolivia association for medicine and friendship．W' Waves、14：102-103、2008

ボリビアのリチウムに関わる

人材育成と技術

国立大学法人山形大学大学院理工学研究科准教授

サンアンドレス・ボリビア国立大学客員教授

綾部 誠

金属元素の1 つであるリチウムは、高密度エネルギーという特徴を有しており、特に移動を伴う電子機器（携帯電話、パソコン、カメラ等）のバッテリーとして広く利用されている。またリチウム

はアルミニウム軽合金、釉薬、ガラスなどの材料にも用いられている。新興国や開発途上国の急速な経済成長に伴って原油価格は高騰・高止まりすることも予想されていることから、自動車業界では今後、ハイブリッド車や電気自動車に転換していくことが確実視されている。

また 2011 年 3 月 11 日に東北の三陸沖で発生した東日本大震災の影響によって、日本はエネルギー政策を脱原発へと転換することが避けられず、そのために自然エネルギーの積極活用と夜間電力の日中における利用という側面からも、蓄電装置の開発・生産が拡大すると考えられる。

このように日本に限らず、世界的に見てもリチウムの需要拡大は注目されており、当面の間は蓄電素材としての優位性が保たれることであろう（将来的には、さらに高密度エネルギーの特徴を有するナトリウムイオン電池や空気電池に移行する可能性はある）。よって炭酸リチウムの世界埋蔵量の約半分を蓄えるとされるボリビアのウユニ塩湖に、いま熱い視線が注がれている。

このようななか、石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）は、2010 年 11 月に、ボリビアの鉱山開発公社（COMIBOL）との間で、ウユニ塩湖のリチウム等の資源の産業化に向けた研究および開発に関する覚書を取り交わし、同年 12 月にはモラレス大統領が来日して、菅総理大臣との間で、炭酸リチウム関連産物およびウユニ塩湖のその他の副産物の産業化に向けて、共同で取り組むことが首脳声明として発表された。

ボリビアは、これまでの資源略奪に対する苦い経験から、同国のリチウム開発については、採掘権を他国に譲渡するのではなく、技術と投資の支援を各国政府に求めるという姿勢を貫いている。そのために開発主体はあくまでも政府系公団である COMIBOL とし、国営を堅持した形での開発を目指している。そのうえでボリビア政府の望む技術と投資に対して十分に協力しえる国に対して、産出・加工したリチウム関連製品を相応分、輸出割当するという方針をとっている。2014 年には投資

を受け入れて事業化し、2015 年にリチウム関連製品を本格的に輸出することを目指している。

このようなハードルが存在するにせよ、ボリビア側がリチウムの産業化を条件として掲げている以上、日本としてもボリビア国内における産業化を多面的に支援し、段階的な技術移転を伴いながら、ボリビアの社会・経済開発と一緒に担うパートナーとして、開発を進めることが求められている。リチウムに関する上記のようなマクロ的な動きがあるなかで、筆者は同国において 16 年間にわたって高等教育機関等で技術協力や技術教育分野における草の根の活動を展開してきた。また現在はサンアンドレス国立大学でも教鞭も執っており、これまでに 500 名近くの学生、教員、市民などが、私の技術移転・技術経営・産業開発などのセミナーに参加してきた。近年では、同国の高等技術専門学校やオルロ国立工科大学などでも、同様のセミナーなどを開催し、数多くの関係者が参加している。



（山形大学協定校の UMSA との学術交流）

これまでの筆者の同国における経験を通じてリチウム開発（特にウユニ塩湖）に関わる課題を鳥瞰すると、次の 2 つの問題が存在していると考えている。

第 1 に、経済的に採算の取れるリチウムの分離・抽出・回収技術が、まだ十分に確立していないということである。現在、ウユニ塩湖の湖畔にあるパイロットプラントで各国が実験を開始する準備を進めているが、採掘場所によって大きく異なる成分構成、雨期という環境上の制約、内陸国であ

るが故の移動コストの問題などが存在するなかで、天日干しに勝る市場価格で競争し、大量生産が可能な技術を確立するには、まだ相当の時間が掛かるものと見込まれている。これは他の競合する国々にとっても共通する課題である。

第2はボリビアにおける産業化に関わる人材確保が大きなボトルネックになっているということである。ボリビア政府は国内での産業化を目指しているが、仮に効果的なリチウム抽出・回収技術が確立したとしても、これをプラントで精錬し、バッテリーや電池などの形に変えて輸出するには、一定レベルの技術（リチウムに関わる裾野の広い技術）や経営能力を有した人材を、相当規模で動員しなければならないことがある。しかし現在のボリビアの高等教育機関（含む高専）や職業訓練校などでは、機材不足や教材不足、更にはカリキュラムや学校経営などの問題のために、これが適わないという課題を抱えている。

このように同国の産業化に向けては2つの大きな課題を抱えているが、一方で確実に言えることは、数ある競争国のなかで、最も確実にこれらを克服できるのは、実は日本だということである。

日本には資源開発、材料分析、リチウムの応用技術などを研究する大学や研究所などが数多く存在しており、加えて学会活動を中心とした情報共有や共同研究も盛んである。また電池メーカーなどには、製品化や事業化のためのノウハウや経験が蓄積されている。

さらに日本は明治維新後、開発途上国から先進国にのし上がってきたという世界的にも稀な歴史的経験を有しており、如何にして効果的に外国の技術を導入して土着化を促し、地域開発を伴いながら成長を成し遂げたのかという経験・知見が豊富である。加えて日本にとって有利なのは、日系人の同国における長年の活躍や裾野の広い継続的な開発援助の実績、さらには真面目・正直・勤勉というボリビア人が持つ日本人に対する印象が、他国と比較しても良いことがある。

今回のボリビアのリチウム開発については、日本

政府はオールジャパン体制で支援を行うことを重ねて表明しており、先の日本・ボリビア政府が共同で開催した「経済開発セミナー」（2011年2月開催、ラパス市内）には500名もの関係者が参加した。このセミナーのなかで筆者は、これまでに記した日本の特徴を踏まえたうえで、日本の大学としての独自の支援策（山形、東北、秋田、京都の4大学連合による人材育成計画）に関する素案をボリビア国内と国際社会に向けて発表した。



（2011年の経済開発セミナーの様子）

この素案では、各大学が有するリチウム関連技術と裾野の広い技術に関する資源、ノウハウ、経験、研究能力などを積極活用することで、リチウム開発に関わる人材を多面的に育成することで同国の開発を、特に教育の側面から強力に支援しようとするものである。

現在、この素案については、関係機関の間で協議を進めているが、このような支援案自体、ボリビアにリチウムが存在することが判明していない時代から、コツコツと地道で長期にわたって支援活動を継続・展開してきた日本にしかできない強みでもあり、また日本が自らの開発経験を通じて体得した得意な分野でもある。

前回の経済開発セミナーで提案した素案については今後も国内外の関係機関からの支援を頂きながら確実に具現化し、ボリビアの経済・社会の発展と日本の産業界の飛躍のために大学の立場から支援を行いたいと考えている。これが強いのはボリビアの社会・経済・人間の諸開発に貢献するものと確信している。

ボリビア訪問記（第2回）

日本ボリビア協会 理事 杉浦 篤

前回 16 号に続き、2 月 11 日（金）～3 月 10 日（木）のボリビア訪問の内、今回は前半に当たるサンタクルス地区（2 月 12 日～18 日）の訪問について報告します。

サンタクルス地区の訪問先は、サンタクルス市、オキナワ移住地、サンフアン移住地の 3 か所に大別されます。

[サンタクルス市]

サンクルス中央日本人会では吉家会長、比嘉幹事長、坂口監事長、渡辺・平良理事、吉永監事、内田事務局長の皆さんと 2 月 17 日（木）に食事会・懇談会の 2 度に亘りお会いした。

当会は 1956 年設立、サンタクルス市に本部を置き、正会員は 171 名（日本人、日系人）臨時会員として日本語学校成人クラス在学のボリビア人も在籍している。

年間定例事業として成人式、カラオケ大会、運動会、盆踊り、母の日、敬老会、慰霊祭等を実施していること、当会会館内にある日系診療所にて日系医師グループによる日系・ボリビア人社会の健康管理、医療相談、健康診断、高齢者福祉（デイサービス）を推進していること、日本語普及学校を、当会内校舎にて、教員 9 名、生徒 72 名で、会員子弟対象の補修クラス（初・中・上級・特別の 9 クラス）と、ボリビア人対象の普及クラスを運営し、卒業時で日本語能力検定 2・3 級取得を目指して支援していること、50 周年記念誌編纂委員会を設置していること等を伺った。

なお、日本のいろいろな機関・団体から新品・中古の医療機器の寄贈を受けて大変感謝しているが、当地のメンテナンス力が十分でない為、その性能を十分使いこなせていない状況にあり、できれば日本から保守の力をつける研修支援を合わせて得られれば大変有難いとのことであった。

[オキナワ移住地]



オキナワ日本ボリビア協会の、中村会長、桜井副会長、宮城監事（兼ボリビア沖縄県人会会長）及びその母体のコロニア沖縄農牧総合協同組合・略称 CAICO）の比嘉組合長、知花副組合長、福地総支配人、親川工場長の皆さんと 2 月 15 日（火）にお会いし、昼食を頂く（上記写真）と共に現在建設中の CAICO の小麦粉・パスタ工場を見学させて頂いた。

当移住地は、第 2 次境大戦で廃墟と化した沖縄を救援する目的で、1954 年以後 1964 年までの間に、延 19 次に渡り、678 家族、3229 人が、沖縄から当地に渡り、約 1 万 ha の土地を第 1、第 2、第 3 の入植地として開拓・建設された。

1998 年に正式な行政区となり、オキナワ村役場が設置され、当オキナワ日本ボリビア協会がコロニア・オキナワの行政機能の多くを担っている。移住地内 280 km の道路維持、治安維持、渉外、診療部運営、健保組合事業、オキナワ第一日ボ学校（西語・日本語部）、ヌエバエスペランサ幼小中学校（西語部）・日本語学校（日本語部）への助成などを事業としている。日本人移住者と日系人は現在 230 世帯、870 人、会員数 892 名会員所有農地面積約 45,000ha、職員数 83 名（学校教員・職員を含む）TV 放送、郵便物集配、日本本籍地市町村への戸籍届出代行、成人式、駅伝大会、運動会などの行事主催を主な事業としている。

立派な診療所には、医師 3 名、歯科医師 1 名、看護師 8 名、ほか計 27 名のスタッフが常駐し移住地と近隣の日本人、日系人、ボリビア人へ充実した

医療サービスを提供している。

4校の日ボ学校には41名の教職員が在籍し、287名の生徒（内日系199名、非日系88名）が学んでいる。

教員の待遇改善に財政上の制約があり定着・増員が困難なこと、土地価格の高騰のため日本出稼ぎ帰国者の土地取得が容易でないこと、移住地周辺のボリビア人農民との土地境界確定問題などが懸案事項とのこと。

CAICO 主要農産物は、小麦（40,000t/年）と大豆（60,000t/年）であり、これらに付加価値をつけるために1500万米ドルを投じて建設中の小麦粉製粉工場（年産10,000t）パスタ製麺工場（年産30,000t）を見学させて頂いた。極めて大規模（パスタは国内予想シェア33%）な工場設備はイタリア製で最後の据付調整中であった。（その後6月に完成）この工場がCAICOの経営とオキナワ移住地や周辺サンタクルス州の雇用創出に大きく貢献することをお祈りすると共に、その製品の販路開拓に何か力になれないかと思った。

また大豆は主に飼料用に加工され、ボリビア国内向と輸出が各50%ずつ出荷され、隣国ペルーには海外支所があり、最優秀輸出業者として表彰されている。

その他肉牛・牛乳・養豚など畜産物も生産し、オキミルクブランドの牛乳加工工場を持つ。

[サンファン移住地]

サンファン日本ボリビア協会では石澤会長、佐久間副会長、大西幹事長、森坂事務局長とサンファン農牧総合協同組合（CAISY）の池田組合長、近藤総支配人、近藤監事長、サンファン市の伴井市長、及びボリビア日系協会連合会の日比野会長、佐藤事務局長に2月16日（水）にお会いし、本部、移住資料館、診療所、農業試験所、と共に、当組合の主要農産物である鶏卵を生む養鶏場、米生産の水田、柑橘・マカデミアナッツ農場などを見学した。

当移住地は1955年以来1992年迄に、302家族、1684名が入植し、その後厳しい地理・自然

条件や水害などでサンタクルス市やブラジル・アルゼンチンなど南米他国へ再移住した方々もあったが、現在244戸747名の日系人が居住している。移住当初はほぼ日本全県から移住者があったが現在は長崎、福岡、北海道、高知、熊本などの出身者が多い。

移住地の産業は農畜産業が中心で、CAIS（組合員数103名、職員数242名）を中核組織として鶏卵用養鶏、稲作（陸稲・水稻、年3-4万t）大豆（同1-1.5万t）、ポンカンなどの柑橘類、マカデミアナッツなど多角経営が特徴である。特に鶏卵は年産2.5億個と首都ラパスをはじめ全国に流通して国内生産の3分の1を占め、ペルーにも15%を輸出している。飼料工場、穀物サイロ、農畜産試験所、精米所、なども充実している。

移住地面積は27千ha、移住地は7行政区選出の理事を執行部とし会員251名の会費負担で運営されている。

事業としては、サンファン学園（幼小中学校、204名、日本人・日系人60%、非日系人40%・公立認可校で日西両言語での全日制。教員は日本人・日系人8名、ボリビア人11名、計19名）、診療所（ほぼ全診療科があり、医師・看護師など28名で運営、年間延12千名を診療。80%がボリビア人で地域医療に大きく貢献、高齢化対応が今後の課題）移住地周辺の道路延200kmは日本のODAなどの援助で舗装が進み、幹線路と奥地との接続も可能になった。又、直営のガソリンスタンドは協会最大の収益事業として協会財政に寄与するとともに道路網と合わせて地域社会への貢献大である。

サンファン市役所は2001年に国会承認を受けて発足し地域基礎共同体（OTB）には日系人代表も参加し住民参加型政治を担っている（人口約9千人、市長は移住者二世の協会OB）。サンファン移住地の特徴は農畜産業を中心とした多角的経営戦略を地域全体にも拡大し地元サンファン市の中核としてこの地域の発展に大きく貢献していることである。

サンフアン市市街地も日ボ協会や CAISY などを町の中心として学校・市役所、教会などの主要施設が並び、その周囲に日本人・日系人の住宅、そのまた周辺にボリビア人が住むという配置になっている。

[その他]

サンタクルス市では他に、総領事石井氏、前ボリビア日系連合協会連合会会長の根間氏、元国会議員の長谷氏、北三(株)現地法人 SUTO 社長の古田氏、黒糖の対日輸出会社伊島の社長島袋氏、三菱商事ボリビア事務所長前山氏、サンタクルス輸出組合 CADEX のカールバウム氏(ドイツ系)の方々と個別に面談した。またトヨタ自動車の代理店 TOYOSA S.A. を訪問し社長のサーベドラ氏に表敬した。

モラレス政権の今後について、皆さんの見解を総合すると、支持基盤のポトシの鉱山労働者、チャパレ地区コカ生産組合員、などの支持が下降しているのに加えて、最近発表したガソリン価格の引き上げで大衆の支持は一挙に低下しやや危険な領域に入りつつある。

しかし、抵抗勢力を、訴訟などで追い詰め亡命に迫りやるなど強硬策も発動して抑え込みに成功しており今直ぐ政権が危機に陥るような状況ではない。

また、これらサンタクルス市の方々は総じて世界の大きな流れに敏感であるように見受けられた。一方で移住地の若年層は高等教育を受ける為中学からサンタクルスなど大都市へ移住して地元離れる傾向が顕著であり、さらに共同体機能が移住地自治団体から市当局へ徐々に移管されて行く大勢にある。これにより移住地の財政負担は減る反面で自治の後退のリスクもあり、伝統の維持などが徐々に困難になる可能性も予見される。

上記のほか JICA 奨学生 OB/OG との昼食会に 5 名の出席(男子 3 名、女性 2 名)があり現況報告や活発な意見交換が行われました。

(次回はコチャバンバ・ラパスの訪問について報告いたします)

ボリビア・フォルクローレの最高峰

「ロス・カルカス」40年の歩み

日本ラテンアメリカ文化交流協会

会長 三村秀次郎

「ロス・カルカス」とは、砦(とりで)、辺境の地の守り人、国境を警備する人という意味を持っているという。その昔インカの時代、ボリビアはコジャスージュと呼ばれ、広大なインカの領土の西南地区に位置していた。今のブラジル、パラグアイ、アルゼンチンと国境を接していた。その辺境にあって彼等の領土を守り、そして文化を保存して来たということから命名されたという。

今年が2011年であるから、結成は1971年ということになる。結成当時からエルモッサ兄弟が中心となりグループ活動を進めてきた。現在のリーダーであるゴンサロ・エルモッサも既に創立メンバーであったから、彼の歩みは「ロス・カルカス」の歩みと一致する。亡くなってしまったウリーセス・エルモッサも同様である。末っ子だったエルメールは、結成当初はまだ小さかったので「カルカス」に入ったのは2年後であったという。その時同級生のガストン・グアルディアも一緒にメンバーに加わった。2人はカルカス歴38年ということになる。「ロス・カルカス」結成以前からグループは組んでいたようで、「フォルタレーサ」FORTALEZA というグループ名でアルバムも残されている。そこには、今回も演奏されるであろう「モンテ・プンク」も収録されている。この「フォルタレーサ」はスペイン語で砦の意味、「カルカス」はケチュア語で同様の意味があることから、名前の由来がはっきりわかる。

「カルカス」が注目されたのは「ワヤヤイ」Wayayay が大ヒットしてからである。ちょうど1980年に入ってからで、アルバム・タイトルは「わが故郷の女たちへ」Canto a la Mujer de mi Puebloの中に収録されているが、ここには「泣きながら」Llorando Se Fue も入っている。世界中に多くのアンデス・フォルクローレ・フアンがいて、その大半はケーナ、サンポーニャ、チャランゴと

いったアンデス楽器での器楽演奏曲のファンが多かったし、また自分たちでも演奏する人たちが多かったと思う。「カルカス」の大ヒット以来、アマチュアやプロのフォルクローレ・グループは、演奏と同時に歌唱にも興味を抱き、その方向へと進んでいた。日本の状況も同様である。その後発表されるアルバムは、エルメールのトップヴォイスを中心にコーラスもアレンジされ、魅力的な作品が生み出され、「カルカス」の地位を不動のものとしていった。

彼等のグループの特徴のひとつに、自分たちのオリジナル作品を中心に歌い演奏することが挙げられる。それは特にゴンサロとウリーセス兄弟の才能によるところが大きい。これは私の私信だが、ゴンサロは作詞に、ウリーセスは作曲により才能が認められると思う。またゴンサロはより伝統的、民族的な土臭い作品が多く、逆にウリーセスはロマンティックでメロディアス、そしてよりポップな感覚の作品を多く輩出しているように思われる。そして1990年代に入ると、ご存じ「ランバダ」事件が起こる。ブラジル経由で盗作された「泣きながら」Llorando Se Fue がフランスの「カオマ」というグループで世界的に大ヒットとなり、彼等もその渦中に巻き込まれる。しばらくして盗作が認められて落ち着くが、グループ自身、今度は「ランバダ」のオリジナル創作者として売り出しに奔走することになった。結局はグループとして世界的にはヒットを出すことはできなかった。その中で衝撃的なことは、中心的存在であったウリーセス・エルモッサの病死である。あらゆる意味でこのグループを支えてきたウリーセスの死は、世界にも衝撃を与え、このグループの仲間たちにより大きな衝撃を与えたことだろう。若くしてその才能を失ってしまったことは残念でならない。

1980年当初、最初に来日した当時は、ゴンサロ、ウリーセス、エルメールのエルモッサ3兄弟、ガストン・グアルディア、そして若い2人のフェルナンド・トリーコとエドウィン・カステジャーノスがメンバーであった。フェルナンドのチ

ャランゴ、エドウィンの左利きの独特の演奏のギターと、それぞれに素晴らしい才能を発揮していた。2人とも歌も上手く、後に「カルカス」から独立して「トゥーパイ」というデュオを結成したが、フォルクローレにポップな味付けをした曲で人気を集めていた。



その後10年以上のブランクがあったが、2009年久し振りに「ロス・カルカス」が日本に戻ってきた。メンバーは一新されていて、エルメールとガストン以外は若手のフォルクロリスタで構成されている。中にチャランゴ奏者として日本人の穴戸誠君が加わっていて素晴らしいチャランゴを聞かせてくれる。ギタリストのリン・アングーロは抜群のギターテクニクを持っている。もう1人の若手ゴンサロ・エルモッサ・ジュニアもギター、ビエントス（笛）、歌とさすがにエルモッサ家の血筋を感じさせるタレント性を披露してくれた。ガストンのサンポーニャも衰えを知らない。そのエルメールの歌唱力は以前より円熟味を増したように思える。「カルカス」の伝統はメンバーが変わっても脈々と受け継がれてきた。

それ以前との違いで一番大きな点は、ドラムとベースがバックに加わったことだ。今も尚、脈々と続く伝統的な民族音楽継承グループ、いわゆるアウトクトナと呼ばれるグループの演奏も受け継がれている。そこから派生してステージで聞かせるというフォルクローレ音楽は、ネオ・フォルクローレと言われ、恐らく一番多くのグループが活動していると思われる。更にジャズやロックとフュージョンしたグループの出現も古くからある。

ポップ化した「カルカス」のバックにドラムスやベースが入っても、今や必然といえる。ラテンアメリカ諸国の音楽愛好家は、もう純粋な民族的音楽を聞くことが難しくなったと嘆くが、見方あるいは考え方を変えれば、今もその根底にはラテン民族独特のリズムを、メロディーを、そして文化を感じられることが出来る。



2011年カルカスコンサートは「結成40周年記念ツアー」ということで5月31日長野県佐久市から始まり6月19日の大阪府守口市まで10回公演が行われた。北海道帯広市、東京都立川市・浅草、神奈川県横浜市・松田町、静岡県浜松市、愛知県名古屋市、兵庫県神戸市の各都市で行った。

今回は東日本の大震災や津波の被害者を励ましたいので、「カルカス」のメンバーから義援金を贈りたいと申し出があった。来日記念盤CDを先行販売してそれを義援金に充てて欲しいとの申し入れだった。そして10日間で先行販売のCDは完売し、その売り上げを宮城県に寄付することが出来ました。彼らの日本に対する思い入れは大変大きなもので、今回の公演に対しても日本の友人、兄弟たちに勇気と元気を与えたいと張り切っていた。全てのコンサートは、タイトルどおり熱く観客は総立ちとなり会場は感動の^{るつぽ}坩堝と化した。

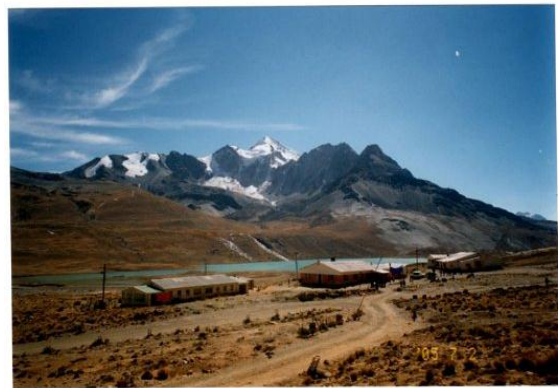
「ロス・カルカス」の40年の歩みを感じられる素晴らしいコンサートが日本で聞くことが出来た我々は幸せといえることができる。

膝関節症、還暦過ぎて初の6000メートル級—ワイナ・ポトシ登頂記

日本ボリビア協会 会長 白川光徳

[山行のいきさつ]

学生時代、ワンダーフォーゲル部に所属し山歩きの楽しさを覚えた。外務省に入り海外勤務の際も、機会があれば山歩きの楽しんでいた。最初の任地のスペイン勤務時には、ピレネー等のスペイン国内の山のみならずヨーロッパアルプスのモンブラン、マッターホルン等に登頂する機会を得た。しかし、年齢が40代半ばにさしかかった頃、小さい時のけがが原因で問題を抱えていた膝関節に激痛が起こり、医者から変形性膝関節症と診断され、山歩きはもちろん、膝に負担のかかる運動は一切控えなければならなくなり、泣く泣く山歩きを断念した。



それから20年近く経ち、ボリビア勤務を命ぜられ、毎日、6千メートルを超えるアンデスの高峰を眺めながら通勤する生活が始まった。そのうち、ラパス市から近く、6千メートル級にしては易しい山があるとの話を小耳にはさんだ。表敬訪問を兼ね、ボリビア山岳会連合会会長を訪ねた。ウオルテル・ラグーナ会長は、先ず、有無を言わず同山岳会への私の入会手続きを取り、会費を徴収した上で、相当な登山経験もある日本の若者が単独で入り行方不明になった例を紹介しながらも、専門のガイドと一緒にいけば小生にも十分登れる山であると教えてくれた。そして同席していた、事務所の職員かと思っていた小柄で典型的な先住民系の容貌の男が、“私が案内しましょう”と申し

出た。エウラリオ・ゴンサーレス(以下、ラリオ)といい、エル・アルト地域の山岳ガイド協会の代表者の由。私も膝への懸念はあったが、6千メートルの山頂を踏む機会はこのボリビア勤務の時期を置いて他にはないであろうと決断、私のワイナ・ポトシ(Huayna Potosí)山行が決まった。ワイナ・ポトシ(6088m)は、ラパス市の北方約40km、車で約1.5~2時間の距離にあり、6千メートル級ではラパス市に最も近い山である。南北7500km、幅750kmにわたり、規模的にヒマラヤ山脈を凌駕する世界最大のアンデス山脈は、はるか北方から南下し、チチカカ湖の北で東西に分かれる。この東側に分かれた山脈の一部がペルー国境から南東方向に伸びてくるアプロバンバ山脈であり、その続きとして、チチカカ湖付近からラパス県を北西部から南東部へ約160kmに渡って連なるのがリアル山脈。ワイナ・ポトシはその主峰の一つである。見る角度により、幅広い氷の屏風のように見えたり、マッターホルンを思わせる鋭い鋭角で天空に聳える姿にもなる。その名は、現地語で、直訳すれば、“若い希望”という意味だと聞かされた。

[トレーニング]

山行に備えてのトレーニングはジョギングが中心だが、課題は、膝の問題と時間の工面。膝の方は、ドクターストップが掛って以来、膝に負担のかかる運動を控えるとともに、膝の筋トレを習慣づけてきた。お陰で激痛は再発していないが、構造的な問題なので安心できず、週末、膝と相談しながら少しずつ距離を伸ばし、坂道を8km位走るようにした(ラパスには基本的に平坦なところがない)。週日は、夜中に家の中の庭を走った。工夫すると1周約200mになる。初めは外の公道を走ることを考えたが、警護チームの責任者から夜外に出られるのなら警護官を2~3人連れて行ってほしいと言われ、警護官が気の毒なのでやめにした。週日は、夜も客を招いたり招かれたりして週のうち何日かは夜遅くまで拘束され、アルコールも入る。そういう時も、水を飲んで体内のアルコール度を薄

め、短時間でもできるだけジョギングを欠かさないようにした。あの公邸の住人で、敷地内を私ほど移動した人はいなかっただろうし、これからはいないであろうと思う。

[単独行のつもりが集団登山に、27年ぶりのテント泊]

決行日は2005年7月2日(土曜日)。当初こちらとしては専属のガイドを雇ったつもりでいたが、その日は、エル・アルト市や地元のボランティアが中心となって、ワイナ・ポトシ及び周辺山岳地域への観光促進の一環として公開募集に応募してきた人達の集団登山の日でもあり、結局一緒に行くことになった。

朝8時にエル・アルトに集合、そこから車に分乗して向かう。途中の村で観光キャンペーンのためのセレモニーに参加したりしながら、登山口のある村ミリュニに1時間半余りで到着。近くのベースキャンプ地(海拔4730m)で簡単なサンドイッチと飲み物の昼食を済ませ、その日の行程に不要な荷物をポーター役に預け、軽装で歩き始める。約1時間40分で、その日の目的地ハイキャンプ・ロカに到着。海拔約5100m。近くに水場があり平坦なスペースも幾つかあるが石ころだらけだ。2~3人用のテントがあてがわれ、いつの間にか現れたウオルテル会長と二人で共用。テントで寝るのは27年ぶり。都会の文明生活に馴染んだ体には、ゴツゴツした石ころの上の寝床は正直、心地いいものではない。結局この日は殆ど眠れなかった。ウオルテルも同じだったようだ。

[山岳会長途中で断念]

翌朝少し朝寝坊した我々2人は大急ぎでスープとビスケットの朝食を取り身支度を整え、出発したのは午前2時過ぎ。頂上を目指す最後のグループとなった。同行メンバーは、ラリオ(ガイド)、ウオルテル山岳会長、私の他に20代の若者、30代後半の中年の計5人。出発してすぐに雪面となり、ヘッドランプの明かりでアイゼンを装着。雪は相当深く、ルートはしっかり踏まれているが、凍りついているため要注意だ。そのうち、ウオルテル

が、靴かアイゼンの具合がおかしいとぶつぶつ言うようになり、遅れ始めた。また、滑って転倒するようになった。先行するグループとの差が段々広がっていくのが分かる。彼は私より3、4歳、年長であり、これまで何回かワイナ・ポトシに登ったことがあると言っていたが、明らかにバテ症状の兆候である。その時、登頂を断念してガイドに伴われて下山中の人と出会い、残念ながらウォルテルは彼らと一緒にここから下山することになった。同時にここから我々グループのピッチが一挙に上がり、遠くに見えていた先行グループの明かりが段々近づき、一つまた一つと追い抜いていった。

[予告もなしにいきなりの垂直の壁・ペケーニャ・パーラ]

出発後2時間余りにあるのが、ゆったり広がった雪原カンボ・アルヘンティーノ。休憩の後暫く進むと先行グループの人達が屯している。午前5時過ぎで、周りは少し明るくなってきていたがまだ薄暗く、黒々とした大きな岩壁のようなものが聳え立っている。”ペケーニャ・パーラだ”と言う。

“エッ ここに登るのか？そんな話全然聞いてないよ”内心驚き、一瞬戸惑った。確認すると、上部岩盤にしっかりハーケンを打ち込んであり、仮に滑落しても途中でザイルで確保されるという。よく見るとペラペラの岸壁面ではなく、細い割れ目があり、それに沿って登っていくようになっているようだ。ガイド達が互いに連携して、自分のチームだけでなく全体の参加者の安全を確保し合っている。私のザイルが確保されたとの合図で両手両足を使って登り始める。足の下とか周囲は見えない。次の一歩だけを見る。一歩一歩は技術的にもそんなに難しくない。垂直に近い登りは数十メートルだったのだろうか、傾斜が少し緩やかになったところで先に登った連中が棚状になった岩に並んで休んでいる。わがチームも全員が無事壁に登り終え先に進む。

[クレバスだらけの雪原]

展望が開け一面の雪原に出た。ここから注意しな

ければならないのはクレバスだ。あっちこっちに赤い旗がいっぱい立っている。斜面に足を滑らさないように、また間違っただが空洞になっている雪面に踏み込まないよう注意しながらガイドを先頭に進む。1時間余り進んだ頃、ワイナ・ポトシの雄姿が視界に広がる場所に出た。東側の壁が頂上から大きく左右に広がり200m以上の落差を持って下りてきている。この辺りでチームの一人の中年男が脱落した。壁にだんだん近づいていくが、ルートらしいものは見えてこない。まさかこの壁に登るんじゃないだろうな、との懸念はだんだん大きくなり、やがてそれが現実となった。近づくと稜線に沿って大小さまざまな岩の間を潜り抜けるように溝状のものが壁面を縦に走っている。この山行の事前打ち合わせで、5万分の1の地図に登頂ルートを示してもらった時、山頂近くでは等高線が非常に狭くなっており、傾斜は55度以上と言われたことを思い出した。チームメンバーの若者もこの辺りでギブ・アップした。高度は5900m前後であり、私にとっても既に未知の高さの世界に入っていた。

[数歩よじ登って立ち止り・最後の上り／ガイドと2人]



結局ラリオと私の2人になった。ザイルを少し長めにし、ラリオを先に急登にかかった。岩と岩の間をすり抜け、潜り抜けるようにしてよじ登っていく。ピッケルを使うより手を使う方が多い。傾斜は急だが、殆どが岩の間をぬって登っている状況なので、仮に滑って転倒しても、岩にぶつかって止まり、下まで滑落することはなさそうだ。少し大きめの落差を踏ん張って上がると心臓が破裂

しように大きく速く鼓動を打ち、暫くは立ち止って呼吸を整えないと進めなくなってきた。この繰り返しを延々と続け一步一步高度を上げていった。
[頂上6088メートル]

この苦しい作業が永遠に続くのではないかと思いはじめた頃、ふと見ると5、6人のグループが座っていてニコニコと挨拶の声をかけてくる。いつの間にか周辺には大きな岩はなく雪原に変わっていた。少し上に別のグループがやはり座っている。こんな所で揃って休息を取っているのだなと思っていたら、ラリオが“さあ着いた、頂上だ”と言う。見上げるとあの幅広い雪と氷の屏風の稜線は5、6mを残すのみで、その上には青い空が広がっていた。午前8時45分。ハイキャンプを出発して6時間45分だった。荷物をそこにおいて稜線まで上がって屏風の反対側を覗いてみる。急峻な西側の雪の壁が広く深く下方に広がり、さらにその向こうには雪のない下界が茶褐色に広がっているのが眺望された。

[お喋り技師クレバスに転落]

登りには1時間余を要した“グラン・パーラ”と呼ばれる頂上直下の急斜面を約30分で下った。そこで景色を楽しみながらゆっくり休憩を取る。この辺りで待っているはずの、途中で脱落したわがチームの2人はいなかった。ここまで来て下山する他のチームに交じって下山したのだろう。その代わり別の2人を拾って一緒に下山することになった。2人とも一応インテリ風の中年男。ここまで来て、これ以上登るのを断念して一緒に連れ帰ってくれる適当なガイドを待っていた由。このうちの一人は40歳前後の体格のいい男で、技師でラパス市役所に勤めているという。雰囲気、振る舞いから見て山歩きは初心者と見うけた。なかなか話好きで、道中、のべつ幕なくお喋りを続ける。下りは、私がトップを歩き、ラリオが最後尾につく。気温が上がり氷が緩んでいる可能性があるので、早朝の登りの時以上にクレバスに注意が必要だ。割れ目の大きい所は迂回し、小さい所は飛び越えたり大股で渡る。ある小さい割れ目に出会い、

ちょっと跳ねて渡った。2人目も難なく渡り、前進を続けようとしたところ、変な音がして、ザイルがぐっと引かれた。3人目のお喋り技師が割れ目を踏み外して中に落ちたのだ。私は先頭の位置でザイルを確保していたので中の様子は見えない。向こう側でラリオが必死にザイルをピッケルで固定して、色々声をかけて励ましながら引っ張り上げようとするが、ラリオは小男、相手は大男、なかなかうまくいかない。ラリオもこちら側に来て3人で力を合わせてザイルを引っ張り上げ、何とか引きずり出すことができた。技師の顔面は蒼白で、手足や顔にも傷が付いていたが、それ以外に大した損傷を受けなかったのは不幸中の幸いであった。クレバスを見てみると、奥は深く底が見えないが、幅がそれほど広くなかった。落ちた際、内側の壁の氷の出っ張りのようなものに体の一部が引っ掛かり、衝撃が緩和されたようだ。その後わがチームは何事もなかったように下山を続けた。ただし、お喋りは一切なくなった。

[ペケーニャ・パーラの下り]

ペケーニャ・パーラの岩頭に着き、朝の登りの時は暗くてよく見えなかった全貌が見えた。まさに垂直に近い断崖だ。そこでラリオが驚くような提案をしてきた。“自分のザイルは60mしかないため、岩に打ち込んであるハーケンに結ぶと下まで届かない。自分が手で持って後ろから確保するから、お前、先頭で降りてくれ。”私は言下に断った。万一滑落した場合、ラリオがそれをザイルで100%止められるという保証はない。結局、80m以上のザイルを持つチームが来るのを待ち、安全を確保して、その岸壁を降りた。この後の道のりは、鼻歌気分であった。

約20年ぶりの山行でワイナ・ポトシに登頂できたことは、それ自体大変嬉しいことであった。しかし、最も心配していた膝に何も問題が出なかったことは、それと同じあるいはそれ以上に嬉しいことであった。これで、ある程度の山歩きなら大丈夫だろうという自信が持てるようになり、翌年5月には、ボリビア最高峰のサハマ山(6542m)にも登

頂することができたが、その話は別の機会に譲りたい。

じゃがいもの旅の物語

インカからジパングまで 16

日本ボリビア協会 副会長 杉田房子

いま、船上からインカの男女が見つめる島と港にいるインディオを脅かすものといったら、ずっと後年にハリケーンと呼ばれることになった台風ぐらいだった。陸の栽培、海の船、それを駄目にしてしまうどころか、島全体を波濤と風雨で洗い流してしまうハリケーン。居丈高なスペイン人がやったことは、しかし、凶暴なハリケーンに優るとも劣らなかったのだった。

「ペルーの財宝を積んだ船が着いた」

港に入った帆船は、ヒスパニオラの関心の焦点になった。砦からは兵士がでて、波止場を警備する。征服者を夢見る者と夢破れた者の集まりは、狼さながらで、コロンブスは早くも第三次の航海記録にこう記している。

「ヒスパニオラの白人のほとんどは、いまや無頼漢に近い。邪心と暴力に満ち、できるだけ物をひつつかんで、逃げだす気だ」

スペイン国王は新世界開拓のために、移住者には大きな特権を与えた。1518年の国王宣言で、移住者は土地、道具、家畜、種苗に加えて1年分の食料も無料で与えられ、教会の寄付以外は20年間も免税される、得たものの千分の一を国王に捧げる十分の一税が、あれこれ徴収されると稼ぎの10分の1しか残らない逆の形容に使われたほどのスペイン本国では、考えられない特権だった。しかし、それにまず飛びつくのは、どうしても浮かび上れない下積みの者になりがちとなる。

「きてみれば、とにかく黄金がある。鉱山で働いたり土地を耕したりするよりも、稼ぐなら泥棒が手っ取り早いという者だってでてくる」

と、コロンブスも嘆くスペイン人は、一つの島の金銀をさらいつくして、次の土地へと流れて行った。カリブ海に住む者が、勝手に他の島や大陸

に移動するのを国王が禁じたのは1526年のことである。違反者は全財産を没収の上、死刑というこの移動禁止令は、移住特権令のわずか8年後にだされたのだった。

それでも、黄金を求める人波は静まらない。万を超えたヒスパニオラのスペイン人が、500家族余にまで減ってしまったのは1574年のことだが、ヒスパニオラ植民地評議会は1558年に本国にこう報告している。

「土地を耕す者なく、われわれは飢えの危険にさらされている。パンもなければ葡萄酒もない。ハム、オリーブ油、衣料、すべて欠乏」

土地のインディオが、パンのように食べるじゃがいもがどこにでもあるとコロンブスがいった島は、半世紀の間に飢えがしのび寄る土地に変わってしまったのである。キューバ島のサンティアゴ・デ・クーバ市に至っては、1574年にスペイン人はたった30家族しかいなくなってしまった。

スペイン人がクーバと呼んだこのキューバ島には、原住民がシバオと呼ぶところもあったので、マルコ・ポーロが「東方見聞録」でいう黄金の豊かなジパングに違いない、とコロンブスが早合点したところだった。トウオブ、カオノ、ノカイ・・・、インディオがいろいろな呼び方をする黄金色の金属をすべて金と思い違えたコロンブスは、土地そのものを「東方見聞録」にでてくるキタイ（中国）やジパング（日本）と思い違えていた。そこで生まれたコロンブスへの悪評が、思ったほどの金にありつけなかったスペイン人の不満とあわさって、彼の失脚とに結びついていくのだが、新世界に「とにかく黄金がある」以上、国王の移動禁止令をもってしても、スペイン人の動きは止められなかった。

「ペルーの財宝を積んだ船が着いた」

という話は全島に伝わり、ヒスパニオラの波止場は、集まってくる目を光らせたスペイン人で埋まった。無関心なのは土地のインディオと、船に乗せられたインカの男女だけだった。インカの男女は、同じような騒ぎをもつパナマとカルタヘナ

で経験していた。その時に聞いた呻きとも唸りともつかないビラコチャのスペイン人の言葉が、ここでも波止場から響いてくる。

「神よ、私をペルーへいかしめたまえ」

波止場でぼんやりしていたヒスパニオラのインディオと、船で食事をしていたインカの男女の双方がびっくりしたのは、積荷がはじまった時だった。荷を背負って帆船に入ったインディオは、台所の煙突から上がる煙の中に、じゃがいもを焼く香ばしい匂いに鼻の穴をひろげた。インカの男女は、着ているものこそビラコチャのスペイン人そっくりだが、肌色も顔形も自分たちそっくりの者ばかりと思っていたインディオのなかに、目の白さが際立つほど肌が真っ黒な人間がいるのに目を見張った。

スペイン人の船乗りは、船が港に停泊している時には町で食事をする。台所のカマドからのばした煙突が煙を吐いても、普通は当直の船乗りが食べるパンか肉を焼く匂いしかない。それなのにじゃがいもを焼く香りが流れてくる。それも、もうヒスパニオラにはあるかないかの極上のじゃがいもの匂い……。

荷を運ぶインディオはざわめいたが、インカの男女は真っ黒な肌の人間を見つめて口もきけなかった。なつかしい匂いにインディオは唾を飲み込んでいたが、インカの男女は運ばれる荷の甘ったるい香りに鼻をむずがゆらせていた。

黒い肌の人間は、スペイン人がアフリカから連れてきた黒人だった。運んでいるのは、アフリカ沖のカナリア諸島から移植した砂糖キビを精製した砂糖と糖蜜だった。黒人はインディオが金銀採掘の酷使で死んだ穴埋めの奴隷で、砂糖キビはじゃがいもさえ乏しくなった土地から新しい富を生むために植えられた。新世界で失われた生命を、アフリカの命で埋めあわせた2つの見本のようなものである。

アフリカの黒人が、いつカリブ海に連れてこられたのかははっきりしない。特別許可書を持つ黒人その他の奴隷に限って移民を許可する、とスペイン

国王がヒスパニオラ総督に書簡したのは1501年だった。しかし、逃亡した黒人がインディオと組んで反抗する傾向に手を焼き、黒人の移民停止を要請した総督は、1503年にはじまった黒人その他の奴隷供給は一と要請書に記している。はっきりしないのは、たぶん、密輸が多かったためだろう。金銀をとりつくした島で、へたに移動すると死刑にあいかねないスペイン人の唯一の光明が砂糖キビ栽培だったとすれば、国王や総督の許可など待っていただけるだろうか。第一、アフリカは暗黒大陸と呼ばれていた。その頃に黒人の移民とか正規、不正規とかをいい立てるほうがおかしかった。

黒人移民という名の奴隷の反乱が再三起きているのは、そうしたカリブ海の島々に連れてこられた者がどれほど多かったかを示している。反乱はヒスパニオラだけで1522年、1537年、1612年と3回にわたっている。1527年プエルト・リコ、1538年キューバ……。密林や山中に逃げた黒人はシマロンと呼ばれ、のちにイギリス領西インド諸島ではマルーン人という山岳地帯の黒人民族まで生まれる元となった。

もちろん、砂糖キビの栽培はそれにつれて増えた。キビの原種はカリブ海の島々にも南アメリカ大陸にもあったが、大量栽培に適したカナリア諸島のクリオーリョ種は、メキシコやブラジルにも移植された。最初は人力、次いで家畜、さらに水力を使った精製は、コロンブスが発見した1492年にゼロだったヒスパニオラの砂糖を、1542年は1200トンも本国に送るほど急増した。

インカの男女が見たのはそうした黒人であり、かいだのは黒人の作る糖蜜だった。数少ない土地のインディオは、インカの男女が焼くじゃがいもの香りを遠い記憶からまさぐるだけの存在になっていたのだった。

ボリビアのニュース

サンファン ABJ 通信より

サンファン移住地は魚の養殖を拡大

ヤパカニ、サンカルロス、ブエナビスタなどの地元の関係者をはじめチャバレ地区やサンフリアン、サンタクルス、グアラヨス地区の市役所関係の指導員など約 80 名が、6 月 28 日にサンファン移住区 22km の水島琢磨さんの魚養殖場に集まり、視察と技術説明会が行われた。水島さんはピリャモンテスからの魚が来なくなったことで、サンタクルス市場からの買い付け量が増えたと説明している。以前は毎月 50kg ほどの売上量だったが、最近ではパクやティラピア、鯉が、月に 2 万トンもの需要がある。

6 万匹のパクを養殖しているが、生産が需要に追いつかず、さらに 22 ケ所の池を造成中とのこと。1 つの池に平均 2,000 匹を養殖し、売上高は kg 当たりパクの場合 Bs20/kg で販売しても 8,000 ドルになるとのこと。

米の値段が下がる

白米の 1 級品で 1 キンタールが Bs150 に値下がりした、3/4 で Bs75 に、碎米が Bs35、糠が Bs30 にまで値下がりしている。FENCA などの統計によると、今年度の収穫量は 2010 年より 10 万トン多い 37 万 7000 トンと豊作であった。関係機関は政府に対して直ちにアルゼンチンやブラジルからの白米の輸入を止めることと、少なくとも 3 万トンの輸出を許可しなければ、市場が飽和状態となり来年の作付にも大きく影響するとして、早期対策を講じる要請をしている。米の主な生産加工地点としてはモンテロ、ポルタチュエロ、ブエナビスタ、サンカルロス、サンタフェ、サンファン、ヤパカニ各地でサンタクルス県のいわゆる Norte Integrado である。この地域には 153 の精米所があり、どこもこの 20 年間で見たこともないように米の山となっている状態である。

CAICO の製粉・製麺工場落成式

この度、CAICO（沖縄農牧総合協同組合）は、1,500 万ドルを投じて小麦製粉工場の

落成式が盛大に挙行された。小麦粉は年間 1 万トン、パスタは年間 3 万トンを生産する

計画で、パスタの 3 万トン生産は国内総生産額の 33%に当たる量である。パスタは

400g 入りで Bs3.5、1kg で Bs6.5、4kg で Bs26、10kg 入りは Bs125 で販売する予定。

製粉工場で生産する小麦粉に付加価値をつけてパスタで販売することが狙いである。

外部借金無で建設し落成したことは見事である。

ボリビア産の鉄が初めて輸出

ムトゥン鉄鉱山の開発にインドの JINDAL 会社が、製鉄所関係の施設を準備していたが

、この度ボリビア国にとって初めてとなる鉄の輸出が行われることになった。初出荷となる鉄を購入するのは中国で、その量は 26 万トン。トン当たりの価格は 62 ドルだという。中国側がアルゼンチンのブエノスアイレス港から大型貨物船で運ぶ予定であるが、いずれにしても輸出できる体制にこぎつけた事は喜ばしい。

しかしトン当たり 62 ドルとはあまりのも安く感じられるが、鉄を含んだ岩石を輸出するののかも知れない。JINDAL と政府が交わした契約によると、ムトゥン鉄鉱山での鉄を販売する都度、売上高の 18%が国に、14%が県と市役所に、そして 4%が鉱物権利金として国庫に納入しなければならない。

柑橘類の収穫・高値で始まる

今年の柑橘は去年の開花時期の異常乾燥が原因で、結実率が地域によっては極めて悪い所もあるが柑橘類の収穫が始まった。しかし今年は果実が少ないからか値段が良い。オレンジ 100 個が Bs40～45、ポンカンで 100 個が Bs35～40、グレープフルーツが Bs50、リーマが Bs35、レモンが Bs15～20 で取引されている。しかし 4 月半ばを過ぎる

と幾分安くなることは避けられない。柑橘類や改良種のマンゴなどは周辺のボリビア人農家も多く栽培してすべて収穫期が同じ時期となるため、どうしても需要と供給の関係で根が安くなる。

半ばあきらめている日系農家もあるのではないと思われるが、開花前の時期から灌水をして土壌湿度を保つように工夫すれば毎年良い結実が期待でき、それなりの収穫量と価格も確保できると思う。誰か若い方で技術改善に努力して現在の永年作物に付加価値をつけるよう取り組んではいかがでしょうか。

聯合ニュースより

韓国とボリビア、リチウム電池合併事業を推進

韓国鉱物資源公社とポスコで構成された韓国コンソーシアムは7月30日にボリビアで、同国の国営会社 COMIBOL とリチウム電池事業の推進に向けた了解覚書(MOU)を締結し、合併会社を設立することで合意した。鉱物資源公社が31日に明らかにした。両国は早期に

タスクフォースを設置し、リチウム電池事業の推進に向けた実務協議に着手することにした。鉱物資源公社は「ボリビアリチウム電池事業の共同推進のため外国企業と MOU を締結したのは初めて」だと説明し、韓国がボリビアのリチウムの確保競争で優位に立ったことを意味すると評価した。

東日本大震災義援金のお礼

今回の大震災の義援金がサンファン日ボ協会及びラパス日本人会より送られてきました。海外日系人協会経由で被災地の宮城県・福島県・岩手県の3県の東京事務所代表を通じて手渡されました。

他の国の日系人団体から送られた分も含め総額約13,000万円で、3:3:1の割合で3県に分割して贈られました。厚く感謝申し上げます。

ラパス日本人会 5,000 ドル

サンファン日ボ協会 45,421.93 ドル

会員の皆様へのお願い

会員勧誘にご協力を

日頃より当協会にご支援を賜りありがとうございます。定時総会で承認された予算を執行するには現在の会費では不足いたしております。事務局としても会員の勧誘等を行っていますが会員の皆様にもお知り合いの方に声をおかけしていただけないでしょうか。宜しくお願いいたします。

なお会員登録は当協会のホームページからできます。また必要でしたら入会申込書をお送りいたしますので事務局まで連絡をお願いいたします。

編集後記

編集委員 金田正敏

カントウータ17号をお届けいたします。

今号は平成22年度定時総会の決定事項、並びにボリビアで活躍する日本企業、またボリビアで開催されたリチウム・医療セミナー、そしてfolkloreコンサートなどボリビアに関する記事を当協会の会員の方々に寄稿していただきました。

今後は会員の方も含め、広く日本の方々にボリビアを知っていただくための記事を増やしていきたいと思っております。

またこの会報はボリビアのサンファン日ボ協会にも配信され、日系人の方にも読まれています。

次号は日本で活躍されているボリビア人またボリビアの日本企業、日系人協会などの記事を載せたいと思っています。御協力の程よろしくお願いいたします。

(編集委員)

杉田房子 細野豊 金木克公 細萱恵子
金田正敏